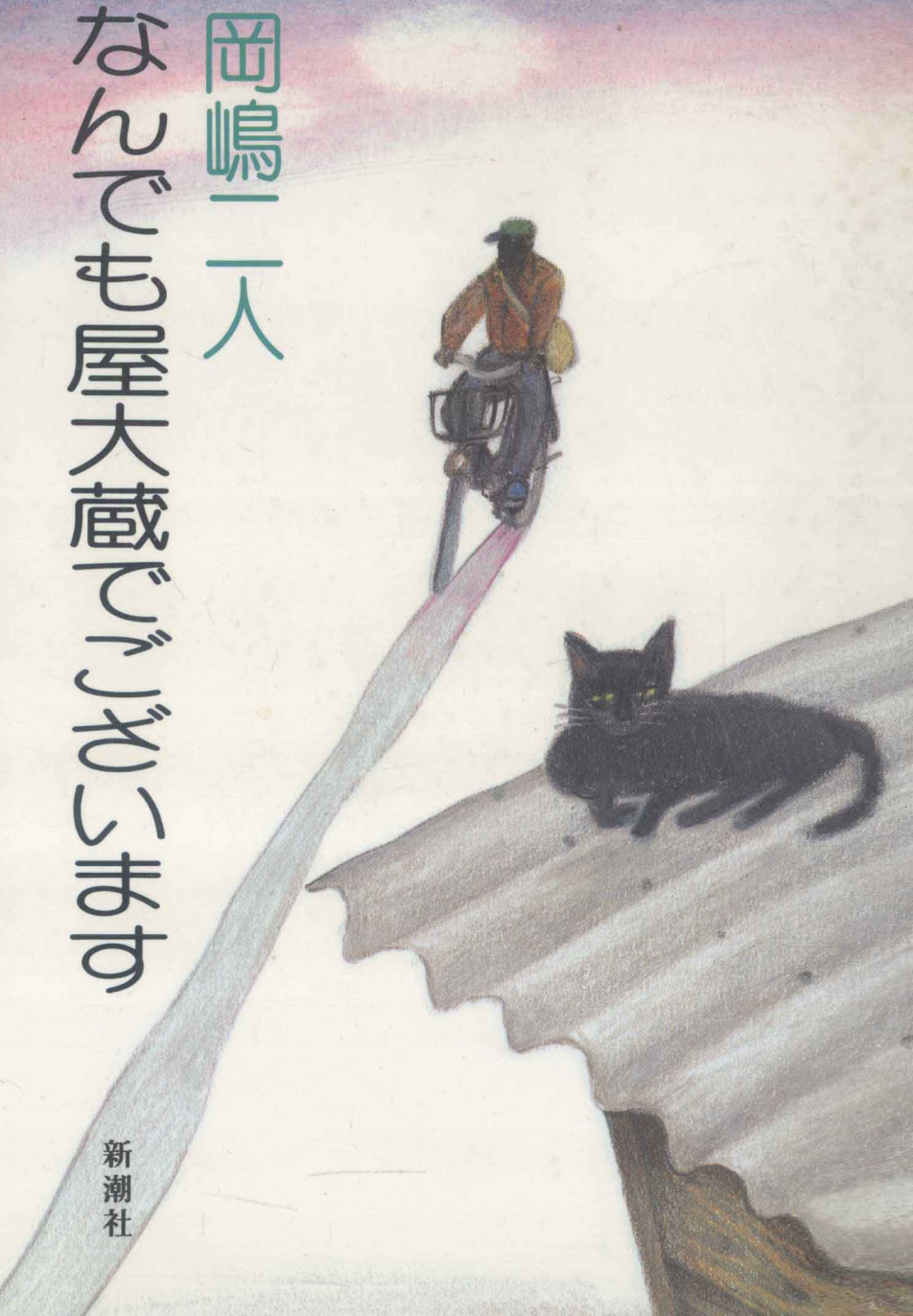
なんでも屋大蔵でございます

岡嶋二人

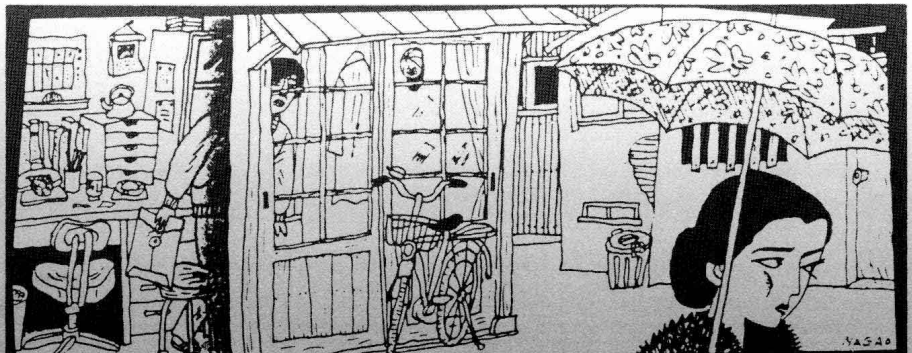


新潮社

なんでも屋大蔵でございます

岡嶋二人

新潮社



なんでも屋大蔵でございます　定価一一〇〇円

昭和六十年四月一日印刷
昭和六十年四月五日発行

著　者　岡嶋二人（おかじまふたり）
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社　郵便番号一六二　東京都新宿区矢来町七一
電話　業務部（〇三）二六六一五一一一
編集部（〇三）二六六一五四一一
振替　東京　四一八〇八番

印　刷　株式会社三秀舎
製　本　植木製本株式会社

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Hutari Okajima, Printed in Japan 1985

ISBN4-10-357001-6 C0093

目次

第一話　浮気の合い間に殺人を　5
第二話　白雪姫がさらわれた　53
第三話　パンク・ロックで阿波踊り　99
第四話　尾行されて、殺されて　135
第五話　そんなに急いでどこへ行く　181

装幀・挿画　長尾みのる

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

なんでも屋大蔵でございます

第一話　浮気の合い間に殺人を

なんでも屋の大蔵、などと呼ばれておりますが、釘丸大蔵と申しまして、重宝にしていただいております。ええ、なんでも屋でございますから、ご用命さえあれば、それこそなんでもいたします。

屋根、垣根の修繕や、障子、襖の張替え、お子様のお守りに、ご旅行中の猫チャンのお世話。『宇宙戦艦ヤマト』を一番乗りで観たいというお坊っちゃまの代わりに、前の晩から映画館の前に並んだこともございますし、急性盲腸炎で入院された町会議員さんの代理として、結婚式の祝辞を読んだこともございます。それから、世の中にはずいぶん変わったご趣味をお持ちの方もいらっしゃるもので、誰かに覗かれていないと燃え上がらないと申されまして、一晩中寝室の扉の外で、鍵穴に目をひっ付けているような、そんなこともいたしました。

ただ、人殺しだとか、盗人の真似だとか、人様の道に外れるようなことだけは、ご勘弁を願っておりますが……。

ですから、ええ、こんなあたしの体験談でご退屈が紛れるとおっしゃるのなら、お安いご用でございますよ。こういう商売をやっておりますと、珍しいことにも結構出くわすもので、これもなかなか面白い仕事だと、あたし自身気に入っているような具合でして……。

え？　ああ、そのことでしたら、ご心配はいりません。基本料金だけで結構でございます。は

い、そのパンフレットの一番上に書いてありますのが、一時間当たりの基本料金。技術料だの、出張料だのは頂戴いたしませんから。

さて、どんなお話がお気に召しますでしょうか……。

そうでございますね、こういうのは、いかがでしょう?

すこし前の話になりますが、朝のうちから降り続いていた雪まじりの雨が、ようやく収まる気配になってきた、あれは、冬の午後でございました。

一

「あのう……」

あたしが事務所代わりに使っております物置小屋のガラス戸を、まるでビックリ箱でも覗くようにして、薄く開ける者がございます。冷たい風が戸の隙間から吹き込んでまいりまして、帳面から目を上げたあたしの顔を刺しました。

「あのう、なんでも屋さん……」

戸の間から覗く美しい富士額は、山吹夫人でございました。

「これはこれは、どうぞお入り下さい。相変わらず取り散らかしておりますが、ストーブも焚いてございますから」

山吹夫人は他人の目が気になるのか、一度後ろを振り返り路地を窺い見ると、かぐわしい香りを漂わせながら事務所の中へ入ってまいりました。傘立て代わりのバケツを不思議そうに眺め、

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

しばらくためらった末、桃色のかわいらしい傘はバケツの脇に立てかけて置くことに決めたようです。あたしの勧めた丸椅子のほこりを払い、まるで壊れかけた公園のベンチかなんぞのようにハンカチをその上へ敷いてから細い腰を乗せました。平べったい紫の風呂敷包みを大事そうに膝の上に置いて、小さな溜息をひとつ吐いてみせたのは、演出効果を考えてのことでしょうか。

山吹よね子、ご存じじゃございませんか。ほら、高台に大谷石の塀で囲った、たいそうなお屋敷がございましょう。あそこの若奥様でいらっしゃいますよ。先代がお亡くなりになって、それを追いかけるように大奥様が逝かれた後、ご夫婦だけで住まっていらっしゃいます。ええ、あの広いお屋敷に、お二人きりで。以前はお手伝いも置いて、ずいぶん賑やかでございましたのに……。お手伝いがまるで居つかないんでございますね。

嫉妬でございますよ。よね子夫人の焼き餅。おわかりになりますでしょう？　それは大変な焼き餅やきだそうで。

以前も、一度、あたしのところへ来て、主人が浮気をしているように思えるから、一日あとをつけて貰えないか、などと申されまして、閉口したことがございました。

なんでも屋ではございますが、人様の隠しごとを嗅ぎまわるような真似はどうも性分に合いません。ご勘弁を願ったわけでございますけれど、それにいたしましても、どうしてそんなことを気に病むことがあるのでしょうかねえ。あれだけお美しいのに。あたしなんか、もし、あんな方を頂戴できるのなら、それこそ絵姿女房のように……、あ、いや、あたしのことはどうでもよろしいのです。

とにかくその日、よね子夫人が恥入るような口調でしてくれた話は、生まれてこのかた聞いた

こともない、奇妙なものでございました。
「え？　空き巣……でございますか？」
「ええ、主人は会社、わたくしもお琴のお稽古でちょうど家を空けておりましたの」
「奥様、それは、いつのお話です？」
「ついこの前、ほら、ご存じないかしら。宅のすぐ前の道で、人が車で撥ねられたことがありましたでしょ」
「ああ、即死だったと伺いましたが」
「ええ、それ。その亡くなった方が、ウチに這入った泥棒なんです」
「はあ？」
　あたしはよね子夫人の顔を見つめてしまいました。夫人の物言いが、とても悪党に対する言葉とは思えないやさしさのようなものを持っていたからです。
「桂木稔さんという、興信所の所長さんなんです。すこし怖いところはありましたけど、とてもはっきりとものをおっしゃる行動的な方でしたわ」
「あの、奥様のご存じの方で……？」
「はい。無理をお願いして、助けていただいたことがありますの」
「どんな……」
「一度、なんでも屋さんにもお願いしたことがありましたわね。主人の相手の女性を見つけていただけないかって」
「あいや、あの、あれは……」

「あなたは潔癖でいらっしゃるから、引き受けてはいただけなかったけど、桂木さんはふたつ返事でやって下さったんです」
　それは当たり前じゃありませんか、と言いたいところを、あたしは堪えました。だって、興信所の人間が調査の依頼を断るわけはないじゃございませんか。
「それで、その興信所の人がお屋敷に空き巣に這入ったんですか？」
「ええ」
「空き巣に這入って、そのあと、車に撥ねられたと？」
「ええ」
「何を盗んだのです？」
「それが……、報告書ですの」
「報告書。なんの報告書です？」
「主人の素行調査の結果が書いてある報告書です」
「はあ？」
　あたしはよね子夫人の言っていることの意味がよくわかりませんでした。
「ちょっと待って下さい。その報告書は、桂木という人の書いたものとは別のものなんですか？」
「いいえ、桂木さんに作っていただいた報告書ですわ」
「……」
「おかしいと、お思いになりますでしょう？」

「あのう、ええと……桂木は、自分で作った報告書を盗むために、お宅へ這入ったのですか？」
よね子夫人は、こっくりと頷いて目を伏せたのでございました。
うつむき加減の頬にストーブの火が赤く映り、そこだけ窯から出したばかりの磁器を見ているように思えます。あたしはその深い色合いに、なかば吸い取られそうになりながら、よね子夫人の言葉を頭の中で繰り返しておりました。

その日、琴の稽古から帰ったよね子夫人は、家の中の様子がなんとなく違っているのに気がつきました。どこがどうということではありませんが、卓袱台の上、用箪笥の中、手文庫の位置……なにか変なのです。誰かがそこを動かし、また元へ戻したような、そんな気がしてなりません。べつに物差しで計って置いているわけではないのですが、自分がものを仕舞うときにはいつも自然にそうしているきまりのようなものが出来上がっていて、そのほんのちょっとした狂いが、よね子夫人の目に止まったものでしょう。
なんだか気持が悪い……、よね子夫人はそう思っておりました。
玄関のベルが鳴ったのは、そんな時でございました。「警察の者ですが」とインタホンが言い、よね子夫人は不安が的中したような思いに怯えながら、ドアを開けました。
「桂木稔という方をご存じでしょうか」
警官にいきなり言われ、よね子夫人は戸惑いました。
「実は先程、このお屋敷前の路上で桂木稔さんが車に撥ねられまして」
驚いているよね子夫人に、警官は大判の封筒を差し出しました。『カツラギ・リサーチ・セン

ター』という社名の入ったその封筒を見て、よね子夫人はさらにびっくりしました。箪笥の奥にしまっておいた筈の報告書……。不安は一層大きくなりました。家の中にあった違和感は、やはり本物だったのです。でも、よりによって桂木が、どうして……。

「桂木稔さんはこれを奥さんに届けに来て、交通事故に遭ったものと思います。奥さん宛になっていますので、お渡しします」

警官はそう言って帰って行きましたが、よね子夫人はとうとう空き巣に這入られたらしいということを言いそびれてしまいました。いえ、言えなくなってしまったのです。興信所に浮気調査をさせていたなどということが、もし夫に知れたら、それこそ一大事です。警察も勘違いをしてくれたのですから、ここはこのままそっとしておいたほうが良い、よね子夫人は、そう考えたのでした。

泥棒の正体は桂木稔でした。そして、彼の盗んだものは、夫の報告書でした。それはわかったものの、あまりの奇妙な出来事に、よね子夫人は却って気味が悪くなってしまったと、あたしに言うのでございました。

桂木稔が、どうして彼自身の作った報告書を取り返しに来たのでしょう。しかも、空き巣狙いの真似までして……。

二

「奥様、こういうことを伺うのは、失礼かとも思いますが、その報告書にはどんなことが書いて

あったのでしょう?」
あたしが訊きますと、よね子夫人は困ったような表情を額のあたりに浮かべるのでございました。膝の風呂敷包みを、いとおしむかのように撫でさすり、ことさらゆっくりとあたしのほうへ差し出しました。
「どうぞ……」
あたしは、よね子夫人の嫌がることをむりやりさせているような、そんな罪悪感に囚われてしまいました。よね子夫人の仕種が、あたしにそういう感覚を抱かせたのです。
「申し訳ございません」
あたしは、ついそう言ってよね子夫人の手から紫の風呂敷包みを受け取りました。でも、よく考えてみますと、よね子夫人はもともとあたしにこれを見せるつもりで持って来たのです。あたしが申し訳ながることなぞ、どこにもありはしなかったのでした。
「別に、どうということのない報告書ですわ。主人が出張で参った先とか、会った方々のことが書いてあるだけですの」
風呂敷包みを広げ『カツラギ・リサーチ・センター』の大封筒を取り出すあたしの手元を眺めながら、よね子夫人はまた溜息を吐きました。
薄手の保存袋と申しましょうか、糸車に細紐を巻きつけて口を留めるようになっている茶封筒がございましょう。その口を開けると、中には三十ページにも亙って細かく書かれた薄紙の『御依頼調査報告書』と、白黒の紙焼き写真が、これは二十枚ほど入っておりました。
山吹安雄氏は先代山吹安次郎――つまり、安雄氏のお父上でございますが――が創設された大

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com